

というところ、中央アルプスの事業が始まる前段の部分まで来ました。



小林様でございました。いま一度大きな拍手でお送りいただきましょう。(拍手)

〔環境省信越自然環境事務所生息地保護連携専門官 小林篤 降壇〕

1回これで私の話は終わって、この後また中央アルプスに特化した話をいたしますけれども、やはり中村先生の思いとしては、ライチョウをトキやコウノトリの二の舞にしていけない、本当に数が少なくなってしまってから手をつけるのでは遅い、比較的個体数がある中でいろんな事業を展開してライチョウを守っていこうというのが1つの大きな信念でした。

その中で、やはり見守るだけではもう守れる状況ではない。環境省が指定します国立公園なんかの考え方としても触らないようにすることで自然景観を維持するというのが基本的な考えだったわけですが、やはり捕食者の問題、それから鹿やイノシシの問題、見守っているだけでは動物たちは関係なくその場所に入っていってしまいますし、その場所でのいろんなことが起きてしまいます。ですので、もう触らないで守るということではできない。ですから、ライチョウ事業の中でも高山帯で積極的に人為的な介入を行いながらどこまで保全策ができるのかというのをコンセプトにいろんな事業を展開してきたわけです。その信念というものは中央アルプスの事業にまさに引き継がれていろんなことが展開されているわけですが、まずは1度、ここで僕のお話は終わって、次のお話に移りたいと思います。

ありがとうございました。(拍手)

○司会者(本間香菜子) ありがとうございました。

日本の過酷な環境課で命をつなぐライチョウ、たくましさを感じる一方で、やっぱり天敵などもある中で、小林様、そして中村先生のこれまでのたゆまぬ保護活動、調査活動の意義深さというのを改めて感じました。貴重なお話をありがとうございます。

記念講演

演題「集団登山の灯を消さないで」

講師 伊藤 一幸

(元神戸大学教授・宮田村教育委員)

○司会者(本間香菜子) それでは、続きまして元神戸大学教授で宮田村教育委員の伊藤一幸様より「集団登山の灯を消さないで」と題してお話を頂戴してまいります。

それでは、伊藤様、どうぞよろしくお願いいたします。

〔元神戸大学教授・宮田村教育委員 伊藤一幸 登壇〕(拍手)

○伊藤 一幸 皆さん、こんにちは。

ただいま御紹介いただきました宮田村教育委員の伊藤一幸といいます。



この絵にありますように、しらび平まで行く間のバスの中でニホンカモシカを見ることが時々あります。中央アルプスというのは非常にいろんな動植物が豊かなところですので、そんな話も交えながらしていきたいというふうに思います。

今日は難しい話をするつもりはございません。ここにありますように「集団登山の灯を消さないで」ということです。

私は、実は1949年一昭和24年に宮田村の北割というところで生まれました。私は子供の頃からずっと集団登山を見てきました。そのことについて自分で経験し、それが結果的にすごく楽しい登山になったということを皆さんに御紹介して、これからもぜひ集団登山をやめないようにしてほしいということでお話をしたいと思います。

ライチョウ会議ですので当然ライチョウのお話もしますけれども、もう少し幅広いお話をしたいというふうに思います。



がるというコースです。

私の子供の頃は、この宮田村の北割というところを通して、オッ越とか宮田高原を通して伊勢滝を通り、そして上がるというところを見てきました。私は、子供の頃、ここの竹やぶの向こうにたくさんの中学生在が集まってはそこから登っていったというのが思い出として残っております。

私自身はどうやって行ったかという、ここにもありますけれども、もうその頃は、戦後、1957年に伊勢滝までのバスの運行が始まります。それで、私どもは5合目までバスで行きまして、ここから歩いて駒ヶ岳まで1泊2日で登ったということです。

ちょうどバスが動き始めて10年後にロープウェイができました。今日の伊藤市長のお話にもありましたけれども、ロープウェイができたおかげですごく簡単に登れるという山にはなりましたが、反対に登山道が非常に荒れてしまったという、苦労して登ることが少なくなりまして、そういう問題がありますので、これからそのことについて少し話をしたいというふうに思います。

というのは、1967年のロープウェイの開通以降はロープウェイ利用者が一般的となりまして、3年後には伊勢滝までの登山バスの運行が廃止され、現在では車道もなく、登山道も廃道となっているというような状況でございます。



この写真は、実は私の祖父—ここにおられますけれども、明治生まれの私の祖父が西駒に登ったときの写真でございます。背広姿の人もいたりしますが、この頃は金剛杖と蓑のやかさという時代であったというのは、この写真を見れば分かると思います。



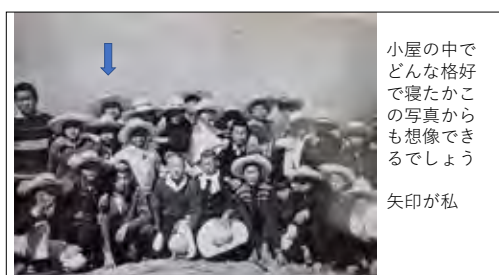
これは1963年の夏、私の中学2年生のときの写真です。

私は、宮田中学校の2年生のとき、学校に行くのに砂袋をしょってずっと練習をして、そして登山をしました。そのときの砂袋だけではなくて、もう4月かしおりが配られておりましたので、高山植物の名前を50種類ぐらい覚えて、そして登山をしたということを覚えております。

いで立ちとしては、地下足袋、それから麦わら帽子というのが、男の子でも女子でも、こういう特徴のものでした。ここに7人ほどおりますが、もう2人ほど亡くなっておりまして、世の中は70歳を過ぎるとなかなか生きるのが大変だなあというふうに思います。



これは御存じのように天狗岩のすぐ前で撮った写真ですけど、どういふわけか、私らが生徒の頃は男の子と女の子が一緒に写真を撮ることが少なかったようで、保健の先生、それから校長先生、それ以外はみんな同級生ですけども、こんな感じで写真に写っております。



いかに寂しい時代であったかということが分かると思いますけれども、山小屋の中でどうやって寝ていたかという、前の人の足が私の鼻先に来るような感じで、男の子は男の子、女の子は女の子で別々の部屋にぎっしり入らして、150人が1つの山小屋で寝たわけで、すごく窮屈だったというふうに思います。この写真を見ても窮屈そうに見えますと思いますが、この写真以上に窮屈に寝ました。でも、決して嫌な思い出ばかりではなくて、やっぱり山の解放感といいますか、山に登った満足感がこのときに得られたので、その後の登山が楽しくできるようになったということを皆さんにお知らせしたいというふうに思います。



高校生の頃の駒ヶ岳登山
ここは天狗岩の頭、怖い



新田次郎の『聖職の碑』

- 大正時代の中箕輪高等学校の西駒集団登山での遭難の話です。
- 映画化もされました。
- 将棋頭山の山頂直下に遭難碑があります。
- これは別に美篤中学にも遭難の記録があります。
- 昔は天候が読めなくて、無理な登山が結構ありました。
- 連絡もできず、強力がついて集団登山を実施しました。
- 集団登山にはリスクがつきものでした。

団登山の中では結構たくさんありました。120年間の中で何回もありました。それでもいまだにやめないということは、集団登山ということがいかに長野県民にとって重要なものであるかということが今まで続いてきた理由ではないかというふうに思います。昔は天候が読めなくて、無理な登山が結構ありました。それで、登山をするには強力がついて途中で動けなくなった人を担いで下りてくるとことは当然やる中で実施されてきたということで、集団登山にはリスクがつきものだということがありました。それで……。



写真は北岳山頂
富士山の次に高い

南アルプス縦走
1971年7月18～30日
三伏峠に荷揚げを
しておいて、丹羽建二
君と二人で。
甲斐駒、仙丈、北岳
間ノ岳、農鳥岳、塩
見岳、荒川岳、赤石
岳、聖岳に登る。



仙丈ヶ岳
山頂にて

その後も、
鋸岳、甲
斐駒、仙
丈、赤石
聖岳など
に登った。



女房とも結婚前から山登り

それで、高校生になって、粋がって—これは後ろが本岳ですから、天狗岩の頭ですね。今は登れませんよ。今は登れませんが、この頃は盛んに登りました。私は大学生になって50日ほど宝剣山荘でアルバイトをしたことがありますけれども、そのときなんかは天狗の鼻の頭に登って粋がっている写真もありまして、そんな写真をお見せすると品がないのでやめさせていただきます。そんな天狗岩の上に登っているときの写真です。

まだ地下足袋ですね。手拭いをいつでも首にかけている様子は変わりません。

集団登山のときにいろんな勉強をしましたけれども、例えば、これは自然保護教育の一環として木札に標語をつけて、そして裏に名前を書いて、ハイマツのところなんかに示してあります。これは中学2年のときにかけたものが高校生になって登ったときにまだありましたというときの写真です。

そんなことで、決して山登りだけが楽しいのではなくて、山登りを通していろんな地元のことをよく知り、自然保護のことも考えるということが大事などころだというふうに思っております。

それから、西駒には「聖職の碑」という新田次郎の小説にもなった碑がございます。大正時代の中箕輪尋常高等小学校の西駒集団登山の遭難の話をもとめたものです。映画を見られた方もあるかもしれません。将棋頭の直下に遭難碑がありまして、その写真を今日はお見せできませんけれども、そんなものがあって、非常にたくさんの方が亡くなられております。できれば、学校の先生方はこの本をもう一回読んでいただければ幸いかというふうに思います。

これとは別に美篤中学にも遭難の記録がありまして、遭難ということが集団登山の中でも結構たくさんありました。120年間の中で何回もありました。それでもいまだにやめないということは、集団登山ということがいかに長野県民にとって重要なものであるかということが今まで続いてきた理由ではないかというふうに思います。昔は天候が読めなくて、無理な登山が結構ありました。それで、登山をするには強力がついて途中で動けなくなった人を担いで下りてくるとことは当然やる中で実施されてきたということで、集団登山にはリスクがつきものだということがありました。それで……。

それでもなおかつ、私は楽しく登山ができたということで、その記憶を基に高校生でもう一回登り、大学生で登り、社会に出てからも登るというようなことをやってきました。

これは大学生になったときに南アルプスを縦走したときの写真の一部でございます。これは1971年7月18日～30日、13日間、三伏峠に荷揚げをしておいて、この順番に甲斐駒、仙丈、北岳、間ノ岳、農鳥岳、塩見岳、荒川岳、赤石岳、聖岳まで2人で縦走しました。

この2人ですけれども、この登山も結構楽しくて、その後、また続きである鋸岳だとか光岳だとか甲斐駒、仙丈、赤石、聖岳なんていうのに登ったりしました。

結婚して、結婚する前後も女房と一緒に登山もしました。

私は谷川岳の雪渓で足を滑らせて背中を 剝いたこともあります

友人が群馬と新潟県境の朝日岳で春の単独登山で遭難して、一週間も行方不明でした。
足を骨折していましたが、最後のヘリコプターで救出され、ヘリポートにいた私も、翌日の全国紙各紙に顔も大きく載りました。
幸い、今でも元気しております。



人が1週間ほど谷川連峰の朝日岳に単独登山をしまして—これはちょうどゴールデンウィークのときでした。それで、彼は足を骨折して雪洞を掘ってその中に隠れていたわけですが、ずっと天気が悪くて、もうこれで捜索を打ち切ろうという最後の日によやく御両親が乗り込む直前に見つかりまして、そのヘリポートに私がたまたまいたので全国紙に写真が出たくらいですが、彼も含めまして今も元気で山登りをしているというような状況であります。



農水の研究員の頃には尾瀬にも何回か行きました



左 乳頭山と秋田駒登山
下 岩手山のコマクサ（手前）とイワブクロ（後方）

これは秋田駒に登ったときの写真ですが、コマクサは火山の山にはたくさんある植物です。そういうことをちょっと覚えておいてください。イワブクロとかコマクサ。



左 早池峰山の侵入植物
スズメノカタビラ
下 薬師岳のオサバグサ群落

それから、早池峰山、これは早池峰山の写真ですが、山頂にスズメノカタビラという帰化植物がこんなにたくさん、オオバコは結構どこにもあるわけですが、スズメノカタビラがこんなにあったということで、たくさん人が登ると結構帰化植物が増えてくるという難しい問題もあるということを思っております。

それから、早池峰の道路を挟んだ反対側に薬師岳というのがありますけれども、薬師岳のオサバグサです。薬師岳とはとてもきれいな山でしたけれども、そんなものもありました。

これは農業研究センターの仲間と4人で7月に月山に登ったときの写真です。もうこの写真にも亡くなった人がいたりしております。



農業研究センターの仲間4人で7月に月山に登山



東北農研の仲間と飯豊山に登山

それから、東北農研にいる頃は、飯豊山、これは農研センターの皆さんとか東北農研の皆さんと一緒に飯豊山に登ったときのものです。飯豊山とか朝日岳とか、それから鳥海山とか、東北にはいい山がたくさんありまして、結構登りました。

次をお願いします。

それから、神戸大学では近くの六甲山に学生を連れてよく登りましたし、この3人はマラウイとかケニアとかタンザニアの人ですが、そんな人も連れて西駒に登ったこともいい思い出になっております。



左：アフリカの友人達を連れて西駒へ
下：神戸大学の学生と六甲山登山



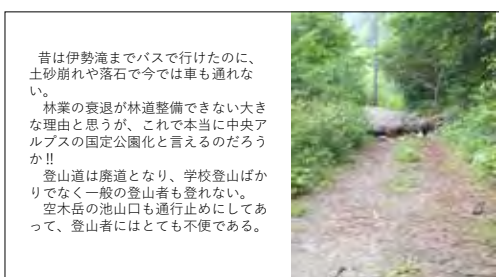
ここ数年は年に10回以上登る
駒沢大学の吹奏楽団の学生らを
案内して千畳敷カールへ



ミヤマキンボウゲの中でのマレーシア
仲間の休憩
クロユリ、オオバキスミレ、タカネヨモギ



最近では装備を充実させて冬山登山もする



昔は伊勢滝までバスで行けたのに、
土砂崩れや落石で今では車も通れな
い。
林業の衰退が林道整備できない大
きな理由と思うが、これで本当に中央
アルプスの国定公園化と言えるのだら
うか!!
登山道は廃道となり、学校登山はば
かりでなく一般の登山者も登れない。
空木岳の池山口も通行止めにしてあ
って、登山者にはとても不便である。

中岳まで行って日帰りをする、またはロープウェイ利用で西駒を往復し山小屋に泊まる、登りは下から檜尾岳を経由して下りはロープウェイとか、いろんなことが考えられます。

檜尾に避難小屋が整備されました。もう少し幅を広げて見てみる必要があるのではないかなというふうに思います。

高山植物を見る。高山植物というのは本当に大きな花で、目立って誰でも分かるような特徴を持っています。

それから、昔の水河の影響のカール地形だとか残雪を見てくれるだけでも世の中が明るくなるというふうに思っています。

集団登山、学校登山についての私見

- ・長野県の中学では120年も学校登山が続いてきました。
- ・生き方が多様化して、登山に不安を感じている保護者がいることも確かです。
- ・頂を目指すだけが登山ではありません。学校登山も3コースくらい用意して、それぞれの生徒にあった登山をしてみてもいいかなというふうに思っています。
- ・例えばロープウェイ利用で中岳日帰り、同西駒往復山小屋泊り、登りは下から檜尾岳経由、下りはロープウェイなど。
- ・高山植物、カール地形、残雪などを見てくれるだけでも構わない。

それで、ここ数年は、私は年に10回以上、ロープウェイの年間パスポートとというのがあって、それで登っています。

この写真は駒澤大学の吹奏楽団の学生を連れて千畳敷カールを一周したときのものでございます。

あるいは、この人はマレーシアと一緒に仕事をしていた仲間ですけれども、そんなグループで登ったこともあります。

中央アルプスのロープウェイを降りたところにクロユリだとかキバナコマノツメだとかタカネヨモギなんかきれいに咲いて、7月上旬にはこんなきれいな写真が誰でも撮れるというふうに思います。

そんなことで、最近は私も装備を身につけて結構冬山にも行っています。ロープウェイで簡単に一年中行けるということで、これは12月31日の写真です。

天狗岩に雪が張りついているのは私の好きな写真の1つですけれども、こんなところに登ったばかりののだということで、今思うとぞっとするようなことですが、装備さえきちんとしていれば伊那谷に住んでいる人は天気がよければ山に登ることができるのだなというふうに思っております。悪天候で行ったら遭難しますよ。

それで、そろそろ本題というか、大事な話をしたいと思います。

昔は伊勢滝までバスで行けたのに、土砂崩れや落石で今は車も通れません。大きな理由として林業の衰退という林道整備ができない理由がありますけれども、本当にこれで中央アルプスの国定公園化と言えるのだろうかというのが気になります。登山道は多くの登山道が廃道となり、学校登山ばかりではなく、一般の登山者も登れないような状況があります。

駒ヶ根の関係でいえば、空木岳の池山口の上のほうを通行止めにしたりにして結構不便だったこともありましたが、何せ伊勢滝まで車で行けないということが今は一番の問題かなあと、これはどちらかというと宮田村の問題かと思っておりますが、気になっております。

それで、では実際に集団登山、学校登山がどうして日帰りになってしまったのかというお話をさせていただきます。

長野県の中学では120年間も学校登山が続いてきました。生き方が多様化して登山に不安を感じている保護者がいることも確かです。頂を目指すだけの登山ではありません。学校登山も3コースくらい用意してそれぞれの生徒に合った登山を考えてみてはいいかなということを経験校であります宮田中学校の田中教頭先生と議論しました。それで、いや、そんなことはなかなかできないよと言われましたが、私は、例えばロープウェイ利用で

でも、中学の行事の多さに私は本当に驚きました。昔は「梅雨明け十日」といって、梅雨が明けた直後に1泊2日で登山をすると大体いい天気に恵まれて楽しい登山ができたのです。ところが、今の中学ではそんな「梅雨明け十日」に登山をするような余裕がほとんど感じられませんでした。それで、中学2年生の夏にとってもいい条件で集団登山ができる状況ではないということもよく分かりました。

CS運動の一環としての集団登山

- 今の中学校の行事の多さに驚きました。
- 中学二年生の夏に、とてもいい条件で集団登山ができる状況でないことを理解しました。
- それぞれの市町村の教育委員会ではコミュニティ・スクール運動や公民館活動の一環として、夏休み中に希望者を募り集団登山を実施してみたいかでしょうか。
- 学校に頼らない中学生の集団登山の模索も必要です。

もちろん中学として登山をしてもらいたいし、できればコロナ禍が終われば山小屋に泊まっていたideきたい、1泊してもらいたいと思っておりますが、それが難しければ、次の方法としてコミュニティ・スクールの一環として集団登山をしてみてもどうかということをは今日は御提案したいと思います。

それは、それぞれの市町村の教育委員会でコミュニティ・スクールあるいは公民館運動として夏休みに希望者を募って集団で登山をするということを今後考えてみてはどうだろうかというふうに思います。それなら、夏休み中に、できれば天気を見ながらできるのではないかというふうに思います。学校に頼らない中学生の集団登山の模索も今後は必要ではないかというふうに思ってお

ります。



千畳敷
カールの
コバイケ
イソウ

2019年は良く
咲いた

これは千畳敷カールのコバイケイソウの群落です。

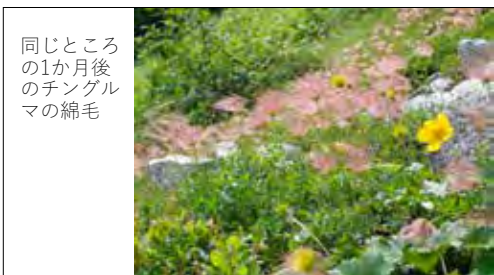
コバイケイソウというのは、よくきれいに花が咲く年とあまり咲かない年がありまして、2019年にはとてもよく花が咲いておりました。

極楽平に向かう途中のチングルマの群落です。7月の下旬だと思います。



極楽平に向かう
途中のチン
グルマの群
落

それから1か月後、8月に入ってからチングルマです。同じチングルマでもこんなに違うということで、これはもう2週間もするともっと綿毛が出てきて、もっと変わったものになります。



同じところ
の1か月後
のチングル
マの綿毛

シオガマも4種類ほどありまして、ここにはエゾシオガマとヨツバシオガマを載せてありますが、千畳敷カールで見たいろんなものがずっと見えます。



エゾシオガマ
ヨツバシオガマ

それから、ウラジロナナカマドは6月の下旬頃のまだ花が咲く前の新芽のウラジロナナカマドです。



ウラジ
ロナナ
カマド
の新芽

そして花が咲いて、虫がここにいますね。つぼみができて花が咲いたナナカマドです。



ウラジロ
ナナカマ
ドの開花

そして、8月の下旬になって、まだ紅葉までには至りませんが、この実がもうすぐ赤くなって、そして全体が紅葉してきます。

いつの時期に行ってもナナカマドはこんな感じなのだということが分かるというふうに思っております。



ウラジロ
ナナカマ
ドの実

もうすぐ
真っ赤に
なる



ヒメウス
ユキシウ
(コマ
ウスユ
キシウ)

それから、これは中央アルプスで一番有名な、エーデルワイスと言われているかもしれませんが、ヒメウスユキシウ、またの名をコマウスユキシウといいますが、尾根筋には非常にたくさんあります。

子供の頃にヒメウスユキシウを見ることで山が好きになるのではないかなと私は思っております。



ウラシ
マギョ
ウ
イワ
メ
チシ
マ
ツ
ジ

それからチシマギョウ、それからウラシマツツジです。

ウラシマツツジというのは一番先に真っ赤になって紅葉します。

それからイワウメ、こんなものが岩の間にへばりついている、こんな景色は、やっぱり駒ヶ岳に登らないと見えないと思います。

下にコケが生えているような感じで、多くの高山植物がこういう状態であるということをやっぱり見てきてほしいなということで、こんな写真を載せました。



トウ
ヤク
リン
ドウ

それから、少し遅くなりますが、8月に入ってからトウヤクリンドウが咲いてきます。これも尾根筋が多いと思います。



宝剣岳の肩のコマクサは在来種でないために抜いた方がいいでしょう
これは五竜高山植物園の写真ですけど

それで、ちょっと苦言を呈したいのは、先ほどもお見せしましたが、コマクサ、駒ヶ岳だからコマクサがあるということで、コマクサはどこかで種をまいているというふうに聞いておりますけれども、どうも種をまいてコマクサを増やすことは、私は、在来種ならまだしも、そういうものが環境破壊になるのではないかなという不安を感じておりますので、そういうことがないようにはしていただきたいというふうに思っております。



最近一おとしのこことになりますが、空木岳に登りまして、70歳を過ぎてからの縦走はきついということをつくづく感じております。

これは私が宮田中学2年生の頃の集団登山の葉です。中扉にはライチョウの絵があり、67ページには中央アルプスに生息していると書いてあります。宮田小学校には剥製があり、役場に展示されています。



中央アルプスのライチョウの系統

- ・宮田小学校にあった大正時代の西駒ヶ岳のライチョウの剥製が昨年になって見つかりました。
- ・この剥製の足の裏の組織から、遺伝子解析を国立科学博物館の西海功氏がしました。
- ・ミトコンドリアDNA（母系遺伝のみ）とマイクロサテライトDNA（核遺伝：両親から受け継ぐ）は御嶽山や乗鞍岳のものと共通であり、南アルプス産のものとは異なっていました。
- ・ハイマツの中のライチョウを見る喜びは格別です。私は昨年、檜尾岳の尾根で母鳥と2羽の雛、東川岳でも別の個体群を見ることができました。



小学生を案内して宮田高原へ



も大事なことと思っております。

それで、氷河湖である濃ヶ池がだんだん小さくなってきている、登山道で崩されて小さくなってきているということで、その維持管理も今後の問題かというふうに考えています。

この5つの問題をこれから少しずつ考えていかなきゃならないのではないかなというふうに思っています。

これからの中央アルプスへの期待と問題

- ・登山アプリなどのGPSを使った高山植物の盗掘の問題解決への取り組み
- ・排泄物も持ち帰る南アルプス南部（飯田市上村、南信濃村）のようなエコ登山の取り組み
- ・山陰海岸や中央構造線のようなジオパーク獲得への取り組み
- ・西駒徒歩登山の基本となる伊勢滝までのバス路線の整備、空木岳の池山ルートの整備、飯島町の越百山登山道などの登山道の整備
- ・氷河湖である濃ヶ池の維持管理

後で小林さんから詳しくお話があるということですので簡単にしますが、私の中学生の頃にはこんなしおりがありまして、その中扉にライチョウの絵が描いてありました。

それで、その当時はまだライチョウがいました。そのライチョウの剥製が宮田の小学校にありまして……。

それを中央アルプスのライチョウがどういう来歴かということで国立科学博物館の方が調べまして、ミトコンドリアDNAとマイクロサテライトDNAから南アルプス産のものとは異なり御嶽とか乗鞍産のものと近縁であるということが分かりました。

そんなライチョウ復活を今回は中村先生たちが中心になって展開しているわけですが、私は、昨年、檜尾の尾根で母鳥と2羽のひな、それから東川岳—これはもう木曾殿小屋の近くですが、そういうところで別の個体群を見ることもできました。そんなことで、これからライチョウの分布の広がることが期待されております。

そのときの写真です。

次をお願いします。

ライチョウです。

次をお願いします。

こんなことで小学生を案内して宮田高原に行ったりもしております。

それで、私としてこれからの中央アルプスへの期待と問題点を5つほど整理してみました。

登山アプリなどGPSを使った高山植物の盗掘の問題解決に取り組む必要があると考えます。

それから、排せつ物も持ち帰る南アルプス南部、上村だとか南信濃村のようなエコ登山の取組も考えていかなきゃならないだろうと思います。

それから、ジオパークの獲得も考えなきゃいかんし、先ほど言いましたように登山道が廃道となっておりますので、それを復活させるというようなこと

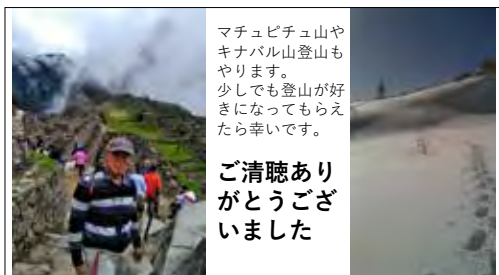
そんなことで、私自身はマチュピチュの山も登りましたしキナバル山にも登りました。海外に行っても結構楽しく登山ができるようになったのは中学2年のときの西駒の集団登山のおかげだというふうに思っております。

こんなことで、少しでも多くの人に登山が好きになってもらえるようにということで本日の話を締めたいと思います。

どうもありがとうございました。(拍手)

○司会者(本間香葉子) ありがとうございました。

登山の歴史をひもといていただきながら、信州が誇るべき集団登山の文化、これをどう継承していくべきか、貴重な御提案も頂戴いたしました。



マチュピチュ山や
キナバル山登山も
やります。
少しでも登山が好
きになってもらえ
たら幸いです。

ご清聴あり
がとうござ
いました

思い出の大切な写真もたくさんお見せいただきまして、ありがとうございます。

どうぞ、いま一度盛大な拍手でお送りいただきましょう。

〔元神戸大学教授・宮田村教育委員 伊藤一幸 降壇〕(拍手)

○司会者(本間香菜子) 伊藤様に御講演をいただきました。

それでは、これより15分ほどの休憩のお時間とさせていただきます。

この後の再開は15時10分頃を予定しております。またアナウンスをさせていただきます。どうぞお時間までにお席にお戻りいただきますようお願い申し上げます。

休憩

記念講演

演題「中央アルプスにおけるライチョウ保護増殖事業の成果と展望」

講師 小林 篤

(環境省信越自然環境事務所生息地保護連携専門官)



○司会者(本間香菜子) 皆様、お待たせをいたしました。

それでは、ここからは先ほどライチョウについてお話を頂戴いたしました環境省信越自然環境事務所の小林篤様に再び御登壇いただきまして「中央アルプスにおけるライチョウ保護増殖事業の成果と展望」について御講演をいただきます。

それでは、小林様、どうぞよろしくお願いいたします。

〔環境省信越自然環境事務所生息地保護連携専門官 小林篤 登壇〕(拍手)

○小林 篤 再びお話をさせていただきます。小林です。

私の想定では、どちらか1つは中村先生がおやりになるのかなと思っていたわけですが、両方とも僕がやれというお達しがありましたので、僕のほうでもう一度お話をさせていただきます。

今度は中央アルプスの事業に特化したお話として、中央アルプスにライチョウが飛来してから、今年は野生復帰ということで動物園から個体が山に戻りましたけれども、そこに至るまでにどのようなことを実施してきたのか、どういうことを検討してきたのかというところをお話しさせていただければというふうに思っております。

先ほど伊藤先生のお話にもありましたけれども、かつて中央アルプスではライチョウは普通に見られた鳥であるということです。それが1960年代後半、くしくもロープウェイが開通した直後ぐらいにライチョウの目撃が残念ながらなくなってしまった、ロープウェイ開通との直接的な関係というのは全く分からないわけですが、同じようなタイミングでライチョウの目撃がなくなってしまったということが報告されています。

1976年～77年にかけて実施された調査に関しましては、先ほど私の話の中でお話ししました羽田先生が中央アルプス全域を調査されて、ライチョウの痕跡等、目撃等が確認できなかったということで、やはりライチョウは中央アルプスでは絶滅してしまったのではないかとことが羽田先生の調査でも確認されておりました。

ところが、2018年、5年前、ぽっと雌ライチョウ1羽が確認されました。7月に当時の環境省の担当のほうに登山者の方から中央アルプ스에서撮影したライチョウの写真が送られてきて、確実にライチョウであるということが確認されまして、7月の報告の後、8月には環境省と中村先生が実際に中央アルプスに行かれて痕跡等を確認しまして、確実にライチョウがいるである

【絶滅した経緯】

1967年	駒ヶ岳ロープウェイが開通
1969年以降	ライチョウの目撃がなくなる
1976-77年	本格調査を行うも確認できず



2018年に約50年振りにメス1羽が発見された。

提供：鈴木圭子氏